

「新しく出会う神」

ハバクク書 2 : 1 - 4

January.7.2024

ハバクク書 2 : 1 - 4 (パワポ)

Preface

今朝も元旦礼拝に引き続き、ハバクク書から御言葉に聞いていきたいと思えます。

元旦礼拝の説教をお聞きになれなかった方は、めぐみ教会のホームページからお聞きになれますので、一度お聞き頂けると幸いです。

せっかくですので、もう一度、壁に掛けられています 2024 年の主題聖句を一緒に声に出して読んでみましょう。

オンラインの方々は、画面に出る御言葉を読んでください。

「しかし、私は主にあって喜び躍り、我が救いの神にあって楽しもう。私の主、神は、私の力。」(パワポ)

元旦礼拝では、この預言者ハバククの告白・賛美に至る前の、神に激しく不服申し立てをするハバクク 1 書の御言葉について分かち合いました。

そして、今日は 2 章の御言葉について考えていきたいと思っております。

Part One

ハバクク書 2 章の御言葉は、1 章の激しい不服申し立てと 3 章の美しい告白・賛美の間にある懸け橋のような箇所となっております。

先程 2 章の冒頭部分をお読みしましたが、1 章のハバククからは、態度が急変したようなハバククの姿から始まります。

ハバクク書 2 : 1 (パワポ)

無我夢中で抗弁を垂れた口を閉じ、今度は目を開き耳をそばだて、「主なる神様が何を見させて下さり、何を聞かせて下さるのか」と、ハバククはその態度・姿勢を変えます。

人というのは面白いことに、その心の内を出し尽くすと、聞く耳を持つようになるようです。

でも問題は、心の内のすべてを言葉で言い表すことは出来ないということですし、どんな人との関係においても、その心の内を出し尽くすことは出来ません。

もちろん、人が人と語り合うということは大切なことですし、慰めにもなり、力にもなることでしょう。

でも、それもある程度までですよね。

どんなに人と語りあったところで語り尽くすことの出来ない心の内、さっぱりしないモヤッとした残りかすのようなものが大なり小なり残ります。

だからなのか、また、人の話を聞くよりも自分の話をすることに忙しく、中々聞く耳を持つことが出来ないのが私たち罪な人間のようなのです。

でも、神との語らい、ハバククのように無我夢中で神様に訴えるような語りであっても、神に対して胸の内を言葉足らずながら明らかにしますと、その心の内がさっぱりしたような、心の内に爽やかな風が吹くような、または、ざわつき砂嵐が起こったような状態から、すべての砂がスーッと落ち着きを払って地面に帰り、空気中が澄んでいくかのように心の内が澄んでいくようになります。

なぜならば、

詩篇 139 : 4

ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそのすべてを知っておられます。(パワポ)

と、聖書に書いてあります通り、私たちの思いのすべてを口で、言葉で表現しきれないその心の内のすべてを神さまはもう既にご存知であられ、私たちが私たちができても知り得ない心の内の渴望だったり、渇きだったり、私たちが知り得ない私たち自身のことすべてご存じであられるがために、言葉足らずで訴えたとしても、「ああ、分かってもらえた、すべて聞かれている」という安心感が、まことの神にまことに祈りますと与えられるからでしょう。

皆さんもこれまで、このようなことを何度もご経験されて来たのではないのでしょうか。

今、ハバククのこの 2 : 1 での心境は、そのような心境にあるのではないだろうかと思像します。

Part Two

そして、遂にと言いましょか、1章の応答に続いて2度目の神の応答がハバククにありました。

「定めの時がある。終わりの時がある。その時が必ず来る」という応答でした。

ハバククが1章で涙ながらに神様に訴えていたのは、「何ですか？ 何で神の民イスラエルが、狂暴で残虐なバビロン帝国に滅ぼされなければならないのですか！」ということでしたが、神さまは、「自分たちの罪を意識することが出来ていない罪深きあなたがたイスラエルへの裁きはしっかりとなされ、イスラエルの滅びは来るが、この世の中のありとあらゆる悪の罪の象徴のようなバビロン帝国にも終わりが来る」ということを語って下さいました。

つまり、「どんな悪も滅びるようになっているから、待ちなさい」と、「信仰者

は、その神の裁きを義なる裁きとして信じ、待ちなさい」と、「まことの神を、まことに信じる者にとって、その裁きは喜びとなり、救いとなり、義なる神の現れを賛美する時となるから待ちなさい」と、「神をまことに信じる者にとって、世の終末は恐れに値するものではなく、究極的な救いになるから待ちなさい」とお語りになります。

ハバクク書 2 : 2-4 (パワポ)

4節の「彼」とはカルデア人バビロンのことです。

つまり、まことの神を神とせず、自らの欲望を満たすことを神とし、そこから派生する思想や考えや社会構造を作り出し、または、自らを神とするような生き方をしている者たちのことです。

カルデア人バビロン帝国は、正にその象徴的な存在であり、国家であり、社会です。

その中枢にあるのはうぬぼれであり、そのうぬぼれゆえに滅びを招くことが決まっていると言います。

ヨハネの黙示録を見ますと、「大バビロン」という名称で、唯一まことの神を神としないうぬぼれに満ちた世界、または人々の最終的な滅びについて預言されるほどに、バビロン帝国は反キリストの象徴として聖書に記録されています。

その一方で、「正しい人はその信仰によって生きる」と、神さま仰います。

新年礼拝の時お話ししましたように、新約聖書のローマ書やガラテヤ書やヘブル書では、「義人は信仰によって生きる」という風に書かれています。

ここで言う、「義人」「正しい人」とは、まことの神をまことに信じる者たち、その神のわざを待つ者たち、怯えながら待つのではなく、期待を持って最終的な義がなるのを待つ者たち、究極的には、主イエス・キリストが再臨され、すべてのものが終わり、すべてが新しくされることを知りながら、主なるイエス様に希望を持って待つことの出来る者たちです。

ここで「信仰」と訳されている言葉「エムナー」とは、持続する、待つ、堅固、まかせて立つ、誠実等の意味の言葉であり、神の摂理と公義をどんな状況にあっても疑うことなく、神さまと親密な関係を持ち続ける態度・姿勢を意味する言葉です。

今ハバククは、この世界が、この世界のまますっと続くことはない、この歴史に終止符を神が打たれるということを知りました。

「だからこそ待てるんだ」と、「結果を知っているから待てるのだ」と、「ただ歯を食いしばって我慢するかのように待つのではなく、希望に満ちた待望が、神の民の待つということだ」ということをハバククは神さまから教えられました。

信じる者たちの「待つ」とは、何の考えもなく、または行く末を知らずに座り

込んで、ただ時間が過ぎるのをじっと待つかのような待ち方ではなく、事の終わりを知っている者らしく平安と共に今日を生きる待ち方です。

この神の応答を頂いたハバククは、「アハー、そうなんだ！」と、「神は正しいんだ！」と、「合っておられるんだ」と、「義なる方で合ってるんだ！ 応答をして下さる神で合ってるんだ！ 私の時ではなく神の時に、私の望む方法ではなく、神の方法で神であられることをお示しになるのだなあ。ならば、その時を待とう。ならば、その時に希望を置いて、今を主と共に、主にあって生きよう。いや、死ぬことを望まれたら死ねばいいし、生きることを望まれたら生きれば良い」という、使徒パウロの「生きるのもキリスト、死ぬのもキリスト、ましてやキリスト信じる者にとって死ぬことは益です」（ローマ14：8、ピリピ1：21）という正に信仰の真髓のような思いに至ったように見えます。

Part Three

「しかし、義人は信仰によって生きる」、「しかし、正しい人はその信仰によって生きる」というこの神からの応答は、ハバククにとって、人生の分水嶺、転換点、ターニングポイント、神と新しく出会った始点となりました。

彼の世界観、歴史観がひっくり返った支点となりました。

ハバククは、「しかしの神」を知るわけですね。

イエス・キリストをまことの神を信じることによって義人と見なされ、正しい人と見なされるようになった者たちは、現実がどのようにひっくり返ったような状況になったとしても、変わらず依然として、神をイエス・キリストを信じ、その道を生きるということを事新たに知りました。

「義人は、それでもその道を行く」、「世がひっくり返っても、キリスト者は、変わらずその道を行く」という神からの祈りの応答を頂いたわけですね。

このハバククへの応答は、私たちへの神からの応答でもあると思います。

イエス様は、「わたしが道であり、真理であり、いのちである」と仰いましたが、私たちはその道を生きるんです。

神さまは5節以降に続く言葉をもって、どれだけバビロン帝国という世の象徴のような存在が悪なのかを明らかにされ、彼らの最後がどのような結末になり、また彼ら、まことの神を神としない者たちが行う悪行の本質について語って下さいます。

どれだけ残忍で、冷徹で、冷めていて、自己中心的で、貪欲に満ちているか、そして、今はどれだけ栄えていたとしても、悪が最後まで最終的に思い通りになり続けることなんかなく、今は威勢が良くても、実のところ滅びに向かって突っ走っていることをハバククに示してくださいました。

そうしてさらに、ハバククは知ります。

何を？

歴史の主導者は、神であられるということをですね。

歴史は、どんな現実の中にあっても、神の御旨がなるところに向かって、神さまがご計画された通りに進んでいるということを知ったハバククは知りました。そして、至った結論が、ハバクク書 2：14 と 2：20 です。

ハバクク書 2：14 (パワポ)

ハバクク書 2：20 (パワポ)

権力者が、財のある者たちが、この現実世界を牛耳っているかのように思えてしまうことがあるかもしれませんが、歴史は、どんな現実の中にあっても、どんな凄惨な中にあっても、神の御旨が成る方へと向かっており、神のご計画通りに事が進んでいるという確信へとハバククは導かれて行きました。

何と幸いなことでしょう。

聖書によりますと、今も歴史は、神さまがお決めになったところへと向かっております。

歴史は今も、不義な者たちが主人となって、その手によって動かされているかのように私たちの短絡的な目には見えるかもしれませんが、神がこの歴史の主人なるお方であり、導いておられるお方です。

そして私たちは、その歴史の断片を生かされております。

断片ですね。

大きな船全体が東の方に向かって進んでいるのに、船のデッキの上で西の方に向かって飛び跳ねていたとしても、船は西の方に進むことはないですよ。

皆が、東の方に向かって進んでいます。

天地万物をお造りになった創造者なる神は、今もおられ、昔もおられ、そして、やがて来たるべきその時に再び来られるお方です。

教会外の世界であっても、教会内の世界であっても、キリスト者であろうがキリスト者でなかろうが、私たちが正気になってしっかり知っておかなければならないことは、歴史は、今この瞬間も、神がお決めになったところへと向かっていているということですね。

歴史は、「神さまがおられない」と、「神なんかいない」と思っているその瞬間でさえも、神さまが統治しておられます。

神を信じる者と信じない者の違いは、この事実を見ているのか、見ていないのか、見る事が出来ているのか、見る事が出来ていないのかの違いだと言っても良いのではないのでしょうか。

歴史の主導者が、神であられるという事実を、イエス・キリストであられるという事実を知り生きている者たちは、世の中が不義に満ち間違っているかのようには回っていても、揺るがされ絡み取られることはないでしょう。

ただ、その道を、イエスという道を生きるのみです。

変わらず、その道を行くのみです。

その道を、信仰によって生きるのみです。

世がひっくり返っても、変わらず依然として、信仰によって今日という現実を生きるのみです。

ハバククが到達した信仰の境地が、まさに、ここです。

前回お話ししましたように、信仰が通じず、神学なんかキリスト教教理なんか全然相手にされず、神を信じているということが益にならないかのようなもどかしさ、苦悩多き現実において、まさにそのような人生の現場において、ハバククは主なる神に新たに会いました。

私たちが神学をし、信仰を生き、聖書の御言葉を生きるとは、私たちの、イエスがキリストであるという明瞭な信仰とそれが通じないように見えるこの現実世界の狭間に立つことです。

その狭間に立って、苦悩し、彷徨い、それでも人生の現場・現実を貫いている神というお方のみわざを一つ一つ捜し当てていく、神というお方を知って行く過程が、信仰を生きる、神学をする、聖書の御言葉を生きるということだと思えます。

ハバククが経験したことは、正にそういうことでした。

「世の中こんななっちゃっているのに、神さま、あなたは一体全体何をしてくるんですか？」と神を問いただし、不服申し立てをしたハバククの訴えは、結局そっくりそのまま、神の手によってハバククのところに帰って来ました。

「世の中こうだけれども、あなたはどの道を生きるんだ？」、「悪しき者によって世の中ひっくり返ってしまっているような時、あなたはどの道を生きるんだ？」とハバククに問われました。

そして、神自らハバククにお与えになった答えが、「しかし、正しい人はその信仰によって生きる。しかし、義人は信仰によって生きる」という答えでした。

Conclusion

世の中ひっくり返っても、キリスト者は、イエスという信仰の道を行います。

ハバククには、これからもうどんなに世の中がひっくり返ったとしても、どれだけ理解出来ない方法で世界が周り、歴史が進んで行ったとしても、イエスという道を進む根拠が明らかになりました。

世界がどうであれ、神がいないという証拠には一切ならず、むしろ、どんな世

にあっても、神はその御業を着々と進めておられるという御言葉がその心に刻まれただけでなく、「時に適って、時が来れば、信仰によって生きる者たちには、必ずや神が分かる」と、「神の御業が分かる」と、「だから待てるんだ」と、「その待つ時間も何一つ無駄になるものなんか無いんだ」と、「だから今日という日をキリストの内にあって黙々と着々と生きていいんだ」と、神からの励ましとチャレンジを受けました。

最後に、ハバククと同じような心境、またはそれ以上とも言えるかもしれないエレミヤの告白を読んで終えたいと思います。

哀歌 3 : 31 - 33 (パワポ)

お祈りいたします。

祝祷：ハバクク 2 : 4 b